

ひぎょうしゃ

飛香舎の障壁画「白河関」



京都御所北側には、平安の古制を復元した飛香舎があります。檜皮葺入母屋造りの建物で、^{はるこ しょうけん}一条美子(昭憲皇太后)の^{じゆだい}入内(明治元年12月28日)の儀式が行われ、^{さくへいもん げんきもん}当日朔平門・玄輝門を経て北の棟門に御車をさし寄せました。

内部は寝殿造りで、床は拭板敷、母屋と廂は^{ぬぐいいたじき}鳥居障子(襖)と妻戸で仕切られています。

飛香舎北廂には、^{みつとき}土佐光時が画いた雪景色の白河関の名所絵があります。白河関は古代に東山道を陸奥国に入ったところ、現在の福島県白河市に置かれた関です。

白河関は歌枕として有名になりましたが、この絵が画かれたときにはすでに廃絶していました。関守がいる板屋の様子は鎌倉時代に成立した『一遍上人絵伝』の白河関の場面にそっくりであり、その絵を下敷に画いたものと考えられます。

飛香舎の襖にはこの他、武蔵野、志賀の山越え、唐崎など名所絵が画かれており、それらは寛政内裏造営時のもので嘉永の火災の際、焼け残ったものです。筆者は禁裏御用絵師である土佐派の土佐光時と土佐光貞で、安政内裏造営の際に、土佐光清、土佐光文が修繕をしています(白河関は光文の修繕)。



南の棟門

北の棟門



ひぎょうしゃ
飛香舎の藤



現在の京都御所北側にある飛香舎は、藤壺とも言われ、紫宸殿、清涼殿とともに平安時代の古制を伝える建物です。

平安宮内裏には七殿五舎

と総称される後宮の殿舎があり、飛香舎はその一つで

した。七殿は、弘徽殿、

承香殿、麗景殿、登花殿、

貞観殿、宣耀殿、常寧殿

で、五舎は飛香舎(藤壺)、

ぎようかしや うめつぼ しょうようしゃ なしつぼ しげいしゃ きりつぼ しゅうほうしゃ かみなりのつぼ

凝花舎(梅壺)、昭陽舎(梨壺)、淑景舎(桐壺)、襲芳舎(雷鳴壺)です。馴染みの薄い殿舎名もあるかもしれませんが、五舎

には源氏物語などでみられる〇壺の別称がありました。飛香舎の藤壺のように、別称は壺庭にある木によって呼ばれたもの

で、襲芳舎の雷鳴壺は、霹靂の木(落雷を受けた木)があったことによるようです。平安時代、飛香舎では「藤花宴」が催されたことが記録に見えています。

時代と共に七殿五舎は廃絶しましたが、江戸時代後期寛政期に造営された内裏で飛香舎が復活しました。ただ平安宮内

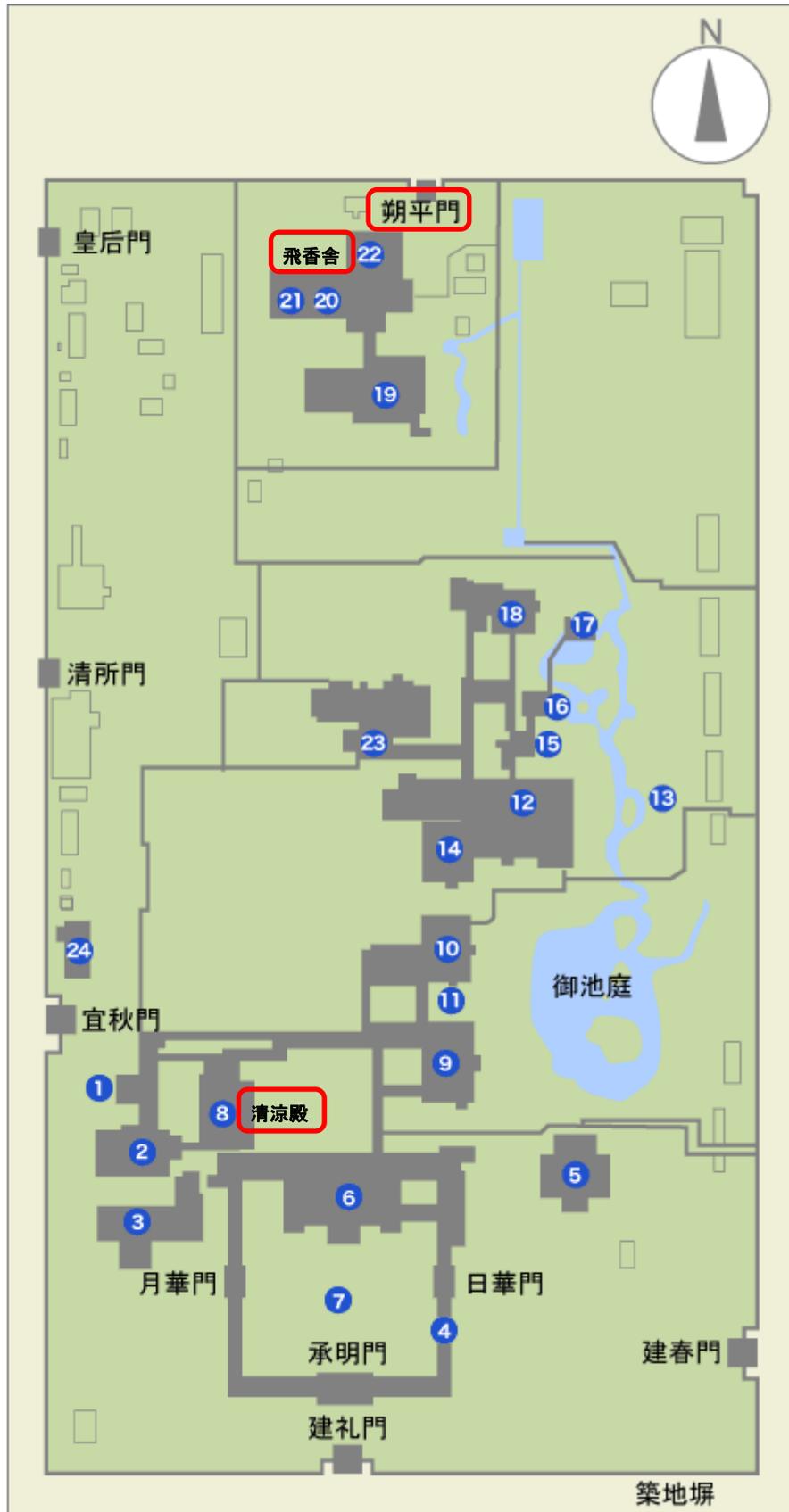


裏時は清涼殿に近いところにありましたが、復活した飛香舎は御所北側で、造営当時は廊下で繋がってはいったものの、清涼殿からは遠い位置になりました。

飛香舎の別称の元ともなる藤ですが、現在の藤の種類はノダフジで、高さ1.9m 幅3.3m 奥行3mの藤棚に満遍なく枝を張っています。毎年ゴールデンウィーク頃に咲き誇り、今年も御所北側で淡い紫色の花を咲かせました。

京都御所案内図

- ① 御車寄
- ② 諸大夫の間
- ③ 新御車寄
- ④ 回廊
- ⑤ 春興殿
- ⑥ 紫宸殿
- ⑦ 南庭
- ⑧ 清涼殿
- ⑨ 小御所
- ⑩ 御学問所
- ⑪ 蹴鞠の庭
- ⑫ 御常御殿
- ⑬ 御内庭
- ⑭ 御三間
- ⑮ 迎春
- ⑯ 御涼所
- ⑰ 聴雪
- ⑱ 御花御殿
- ⑲ 皇后宮常御殿
- ⑳ 若宮御殿
- ㉑ 姫宮御殿
- ㉒ 飛香舎
- ㉓ 参内殿
- ㉔ 参観者休所



観マークは、参観でご覧になれます。申込み方法は、<http://sankan.kunaicho.go.jp/> をご覧ください。

通マークは、申込不要の京都御所通年公開でご覧になれます。

詳細は、<http://www.kunaicho.go.jp/info/kyototsunen-sks-sankan.html> をご覧ください。

これまでの「《京都》御所と離宮の栞」については、宮内庁ホームページの[こちら](#)からご覧ください。

<問い合わせ先>
〒602-8611 京都市上京区京都御苑3 宮内庁京都事務所
代表電話：075-211-1211 参観係直通電話：075-211-1215